科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書

平成 24 年 4 月 20 日現在

機関番号:34316

研究種目:基盤研究(C) 研究期間:2008 ~2011 課題番号:20530174

研究課題名(和文) ヘヴァリッジの研究を核とした福祉国家の起源と現代性の探究

研究課題名(英文) An Inquiry into the Origin and the Future of the Welfare State, based

on my Studies on Beveridge

研究代表者

小峯 敦 (KOMINE ATSUSHI)

龍谷大学・経済学部・教授

研究者番号: 00262387

研究成果の概要(和文):

福祉国家/福祉社会が持続可能かという問いに対して、ベヴァリッジを中核とする LSE の福祉思想は、ケンブリッジ型とオックスフォード型の改良混合 hybrid として把握でき、同時に新自由主義 New Liberalism の完成態であるという仮説を検証した。ケンブリッジ型とは、資本主義の枠内で具体的な政策に結びつく実践的な態度であり、オックスフォード型とは人格の陶冶や共同体の再生といった理想主義的・共和主義的な接近方法である。

研究成果の概要 (英文):

We provide an answer to whether the welfare state or society can survive or not, the answer that economic thought at LSE, the core of which was Beveridge,'s, is a hybrid between the Cambridge Style and the Oxford Style, and a completed idea of New Liberalism. The Cambridge Style means a practical attitude towards concrete policies in capitalism, whereas the Oxford one indicates idealistic and republican approach, such as perfectionism and rebirth of community.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野:社会科学

科研費の分科・細目:経済学:経済学説・経済思想 キーワード:ベヴァリッジ、福祉国家、ケインズ、LSE

1.研究開始当初の背景

福祉国家はどこから始まり、どこに行くのか 。これが申請者の根元的な問題関心である。

フリードマンの批判(国家への依存心を助長する)とブキャナンの批判(赤字財政を構造的にもたらす)によって、1980年代以降、

福祉国家は思想的には解体したかに見えた。 第三の道を標榜するギデンズ(1999:31)は、

保守的な家族像、 国内を制御できる国民 国家像、という欠点が「福祉国家の合意」を 覆っていたと批判した。

以上、左派から右派まで、「ケインズの赤字財政 + ベヴァリッジのバラマキ福祉の時

代は終わった」とする硬直的な見方が、一般 のみならず経済学者・社会福祉学者まで広が った。

2.研究の目的

本研究では以上の経緯と研究動向を踏まえ、福祉国家という理念の起源と現代性を探究する。その目的は福祉国家 / 福祉社会が持続可能かという問いに一定の回答を与え、従来の福祉国家批判に対峙することである。 4年間での絞り込んだ目標として、LSE の福祉思想に着目する。

本研究は申請者のベヴァリッジ研究を核に据えたうえでその殻を破り、個人的自由の侵犯、経済的な非効率、共同体の不在、一国主義という福祉国家への批判に対し、真摯に回答することを目的とする。その過程で、個別思想を越えた「福祉に関する時代精神・観念」が摘出される

3.研究の方法

福祉国家の起源と現代性を探るのに、最適な標的は LSE の福祉思想である。その中で、2つの方向・時代から、(A)国内の経済、(B)国際的な政治経済、(C)共同体(徳)という3つの福祉存続条件を調べていく。

中心となるのは計画の初期にはキャナンであり、後期にはベヴァリッジの連邦主義である。手段としては、大型図書やマイクロ・フィルムを使った資料の分析、海外アーカイブを用いた未公開資料の収集・分析・デジタル化である。

4. 研究成果

福祉国家 / 福祉社会が持続可能かという問いに対して、ベヴァリッジを中核とするLSE の福祉思想は、ケンブリッジ型とオックスフォード型の改良混合 hybrid として把握でき、同時に新自由主義 New Liberalism の完成態であるという仮説を検証した。ケンブリッジ型とは、資本主義の枠内で具体的な政策に結びつく実践的な態度であり、オックスフォード型とは人格の陶冶や共同体の再生といった理想主義的・共和主義的な接近方法である。

具体的には次の成果が出た。

- (1)ケインズの重要な同時代人であるラヴィントンについて、一次資料に基づいたケンブリッジ生活を確定することができた。
- (2)ベヴァリッジの福祉社会論について、 後期三部作の解釈によって再構成が可能で あることが発見された。
- (3)ベヴァリッジの重大な同時代人である ロビンズについて、日本への伝播様式を確定 することができた。
- (4)ベヴァリッジの貧困観・家族観を詳細 に分析することが可能になった。

(5)経済と福祉の連環について、より強い 結びつきを考慮できて、さらにベヴァリッジ の理想が「資本主義の中における幸福の追 求」にあると確定した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に は下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- (1) 小<u>本</u>敦「ラヴィントンのケンブリッジ生活 一次資料から見えるケインズ等の影 」 『経済学論集』(龍谷大学経済学部), 48 巻 1・2 号、1-45、2008.10。 [査読あり]
- (2) <u>小峯敦</u>「F. ラヴィントンにおける企業家の役割 理論構築・現状認識, および規範的な行動基準 」、『経済学史研究』(経済学史学会)51巻1号、59-74、2009.6。[査読あり]
- (3) 小峯敦「ベヴァリッジの貧困観と家族観福祉国家理念の可能性」『社会思想史研究』 (社会思想史学会) 33号、43-56、2009.11。 [査読あり]
- (4)<u>Atsushi KOMINE</u> "Beveridge on a Welfare Society: an Integration of his Trilogy", in Roger E. Backhouse and Tamotsu Nishizawa (eds.) No wealth but Life: Welfare Economics and the Welfare State in Britain, 1880-1945, Cambridge: Cambridge University Press, 298-316, April 2010. [査読あり]
- (5)<u>Atsushi KOMINE</u> "The Diffusion of Economic Ideas: Lionel Robbins in Italy and Japan", with Fabio Masini (University of Rome 3), in H. D. Kurz, T. Nishizawa, and K. Tribe (eds.) The Dissemination of Economics Ideas, Cheltenham, UK: Edward Elgar, 223-259, October 2011.[査読あり]
- (6) 小峯敦「経済と福祉の連環 ベヴァリッジの略伝から現代へ」『経済学論集』(龍谷大学経済学部) 51巻4号、71-92、2012.2。[査読あり]

[学会発表](計15件)

- (1)経済学史学会 2008年度72回大会(於・愛媛大学) 2008.5.25 「共通論題:貧困と福祉の経済思想」「貧困から福祉への昇華:歴史制約下にあるベヴァリッジ理念の普遍性」パネリスト[5名中]。
- (2) 同志社大学経済学部シンポジウム(50

- 周年記念)2009.1.10 「ベヴァリッジの貧 困観と家族観:福祉国家理念の可能性」「福 祉という思想 < 社会 > はいかにして可能か 」、招聘パネリスト[4名中]。
- (3) The Fifth International Keynes Conference 2009, "Global Crisis and Keynes: Present and Past", "The Translators' Report: Keynes and his Battles", Chair: Kevin Hoover (Duke University), 19 March 2009, Sophia University, Tokyo, Japan.
- Conference The Second Joint (4) ESHET-JSHET. "The Dissemination of Economic Ideas". 22 March (Hitotsubashi University, Tokyo, Japan), 22 March 2009, "The Difficult Reception of Lionel Robbins in Italy and Japan", with Fabio Masini (University of Rome 3), Chair: Professor Annie L. Cot (University of Paris 1).
- (5) The 13th Eshet (European Society for the History of Economic Thought) Conference, 26 April 2009, University of Macedonia, Greece, "The Complex Acceptance of Lionel Robbins in Japan", Chair: Professor T. Hirai (Sophia University).
- (6)経済学史学会 2009 年度 73 回大会(於・ 慶應義塾大学) 2009.5.30
- 「日本におけるロビンズの導入過程 1930 年代と 1950 年代 」。
- (7) International Workshop: Cambridge, LSE, and the Foundations of the Welfare State: New Liberalism to Neo-liberalism, (Mercury Tower, Hitotsubashi University), 14 March 2010, "Frederick Lavington on Big Business: Implicit Normative Behaviour of Entrepreneurship", Commentator: Professor Steven Medema (University of Colorado, USA).
- (8) The 14th Eshet (European Society for the History of Economic Thought) Conference, 27 March 2010, University of Amsterdam, The Netherlands, "Frederick Lavington on Big Business: Implicit Normative Behaviour of Entrepreneurship", Chair: Professor M. Dimatteo (University of Siena, Italy).
- (9) The Seventh STOREP Conference (Italian Association for the History of

- Political Economy), 30 May 1 June 2010, University of Trento, Italy, :The Shifting Boundaries between Public and Private in Economics, "Beveridge on a Welfare Society: State, Market and Community", Chair: Professor Francesco Farina (Università di Siena).
- (10) HES 2010 Annual Conference (History of Economics Society), 25 -28 June 2010, Syracuse University, New York, "Beveridge on a Welfare Society: State, Market and Community", Chair: Anni Cot (University of Paris).
- (11) Cambridge Seminar in the History of Economic Analysis, 7 July 2010, Clare Hall, University of Cambridge, "Frederick Lavington on Big Business: Normative Behaviour of Effective Entrepreneurship", Chair: Roberto Scazzieri (Università di Bologna).
- (12)The Second International Conference, 7 March 2011, Waseda University, Tokyo,: "Population, Poverty and Welfare in the History of Economic Thought: an International Comparison", "Beveridge on a Welfare Society: State, Market and Community", Chair: Professor Michael Quinn (University College, London).
- (13) HETSA 2011: History of Economic Thought Society of Australia, Twenty-fourth Conference (RMIT University, Melbourne, Australia), 7 July 2011, "Why did Keynes promote Grace I in 1921? A Cambridge University Officer s Attitude towards Conferring Degrees on Women", Chair: Steve Kate (RMIT University, Melbourne, Australia).
- (14)経済学史学会 2011 年度 75 回大会 (於・京都大学) 2011.11.5「大学行政官 としてのケインズ 1920年代初頭、ケンブリ ッジの女性学位問題 」。(討論者:原伸子・ 法政大学教授)。
- (15)International Conference The World of Finance after Keynes , 22 March 2012 (Sala Gigli, Palazzo Panciatichi e Capponi-Covoni Via Cavour), "Why did Keynes promote Grace I in 1921? A Cambridge University Officer s Attitude towards Conferring Degrees on Women", Discussants: Maria Cristina Marcuzzo (University Rome 1) and Anna

Carabelli (University of Pavia, Italy), Chair: R. E. Backhouse (Birmingham University).

[図書](計2件)

- (1)<u>小峯敦</u> 編『福祉の経済思想家たち』ナカニシヤ出版 2007.4、314ページ(増補改訂版、2010.4、328ページ)。
- (2) <u>小峯敦</u> 編『経済思想のなかの貧困・福 祉 近現代の日英における「経世済民」論 』 ミネルヴァ書房 2011.3、360ページ。

〔その他〕 ホームページ等

http://www.econ.ryukoku.ac.jp/~komine/hope/research.html

- 6.研究組織
- (1)研究代表者

小峯 敦(KOMINE ATSUSHI)

研究者番号:00262387

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: